ウスマン・ディウフさん(30代、バガナ村)「研修で、今まで知らなかったことを知りました。昔は土地が豊かで植物も十分にありました。でも昔と今の状況は変わりました。植生も変わりましたし、井戸の水も減って、土壌も劣化しました。これは村人である私たち自身が原因だということが分かったのです。でもそれまでは知りませんでした。和田が来て研修をする中で意識を持ち始めました。このまま何もしなければ村がなくなって、みんな村を出て行ってしまう。地下水の減少、塩化、そして土壌浸食が起きていること、そしてその対策を学びました。昔は家畜の糞尿の堆肥を使っていて、化学肥料は使わなかった。それが、人口が増加して化学肥料を使うようになった。それがどうして塩化や土の劣化を引き起こすのか、よく分かったし、種市場や化学肥料市場のことも見えた。そこで、解決策はコンポスト(堆肥)だと学んだ。研修で習ったこのようなことを、他の18人の若者たちに伝えました。この地域に少しずつ伝わっていることでしょう。」

#### 【アンテルモンド(協働者)の声】

「これまでたくさんの事業に関わってきたけれど、失敗ばかりだったと言えるかもしれません。資金は多く 費やすけれど、人々の行動変容を起こすのは難しかったです。

ムラのミライのやり方はシンプルで、やり取りに基づいて、相手のことを聞くだけです。村人のやり方をもとに、どうやったら良いのかを村人自身で見つけることを大切にしています。そして、いつも、かならず村の中にノウハウや、地元ならではの強みがあることを基本に、村を直接訪ねるのです。そのアプローチは質問をするという単純なものですが、それによって村が本当に必要としているものに向き合えるのです。このようなやり方はムラのミライから私たちも学びました。」

#### 【農業から教育へ】

近隣の小学校からの依頼を受けて、ファーマーズ・スクールの従業員が学校給食のための菜園で栽培指導をしました。菜園の担当をしている教師に、水やりの量・畑の測量の仕方・コンポストの作り方・天然(有機)農薬の作り方・藁マルチについて教えました。その結果、教師は教わったことを菜園で実施した他、生徒たちに授業で教えて生徒も実践するようになりました。今後この菜園での収穫物は、家が遠くてお昼に家に帰ることができない生徒に提供される給食に使われます。

【執筆者=菊地綾乃 ムラのミライ海外事業コーディネーター】

## ①-2 西宮で広げる、地域で助け合う子育ての輪

期 間 2018年4月1日~2019年3月31日 (2018年4月より開始 2020年度も継続)

場 所 兵庫県西宮市

協働者 a little (ア・リトル) \*西宮市のNGO/NPO

協力者 ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ「JJCC助成プログラム」

事業費 8,289千円

#### 事業の背景(事業を始めた経緯/どんな課題があったか)

少子高齢化が進み、多くの家庭では母親だけが子育てを担うことが当たり前のようになりました。そのような母親の多くを出産後に待ち受けるのは、産後うつ、産後クライシス、乳幼児虐待などの厳しい現実です。こうした課題にどのように取り組めばよいのかわからなかった2016年、西宮市で、妊婦や産後の女性とその家族に、家事サポートや学びの場を提供してきたア・リトルとの出会いがありました。その後、親子のコミュニケーション講座をア・リトルとムラのミライで協働して開催するなど一緒に活動を続けました。そのような過程を経て、2018年4月、JJCC助成を得て、「地域で助け合う子育ての輪プロジェクト」をスタートしました。

## 2019年度(まで)の活動内容(何をしたか)







プロジェクトの1年目(2018年度)、妊婦やその家族への調査や講座、彼/彼女たちを支援したい人たちへの講座を実施した結果、2年目の2019年度は「自宅から半径1.5キロメートルで助け合う子育ての仕組みづくり」に取り組みました。

具体的には①産前、産後の家族への講座、②地域で産前・産後の家族を支援したい人向けの講座、③産前産後の家庭への訪問活動(ファミリースタート)です。

①については、産前の家族には「出産後|カ月の産褥(じょく)期にきちんと養生できる準備」を3回、産後の家族には「出産を振り返り、パートナーと家族のこれからを考える時間」をテーマにした講座を3回実施しました。また2018年度の調査の結果、男性の分担が最も少なかった家事「料理」の講座(男性のみ対象)も2回、行いました。

②については、地域子育てサポーター養成として、産前産後の女性の心と体の変化、子どもの発達、西宮市で活用できる産前産後サポート、サポート時のコミュニケーション(メタファシリテーション)の講座を延べ8回実施しました。

③のファミリ―スタートでは、②の 講座を受けた方が実際にご近所の産 前産後のご家庭を訪問しました。

# 2019年度(まで)の成果(何が起 こった/変わったか)

これらの活動の主人公は、地域から孤立したままで出産を迎えようと



していた人たち、産後に「孤育て」をしていた人たち、そして彼/彼女たちを支えるア・リトルのメンバーです。そしてこのような活動を通じて起こったこと、それは「つながりがつながりをつくる」動きです。

例えばこんな動きがありました。

- ・ 産後の家族向けの講座に参加した人が、ファミ リースタートに申し込んだ。
- ・ サポーターが子育て中の方のご家庭を訪問し、 おしゃべりするなかで、西宮市で活用できる 様々なサポートを紹介した。
- ・ それらのサポートを使った産後の家族が今度は 自分の知り合いにすすめた。
- ・ 料理講座で出会った男性同士が別の集まりにも 家族で出かけるようになった。

自分の「孤育て」の苦労を他の人はしなくてすむよう に、とサポーター養成講座に参加した。



自宅から1.5キロ圏内でなくても、3キロくらいで「つながりがつながりを生む」、そんな動きが始まった2年目。またこれまで任意団体だったア・リトルは、2019年12月にNPO法人となりました。ムラのミライが講師をしていたコミュニケーション講座も、2020年2月には西宮での子育てサポートに使う事実質問の実践例をたくさん盛り込んで、ア・リトルのメンバーが講師を担いました。西宮市とア・リトルの協働事業「もうひとつの両親学級」も実現した2019年でした。

ア・リトルへの伴走支援も2年が過ぎました。事業名には「助け合う」という言葉が入っていますが、実は「助ける」も「助けてもらう」も両方の経験がないと、とてもハードルが高いこと、まずは「つながる」必要性に気づかされた2年目でした。そんな大きな気づきや学びを与えてもらっているのは、ア・リトルの活動に参加させてもらったおかげです。

【執筆者=原康子 ムラのミライ研修事業チーフ】

### (2)特定非営利活動に係る事業 ②人材育成および研修生受け入れに係る事業

②-| メタファシリテーション伴走支援事業

期 間 2019年4月1日~2020年3月31日

場 所 ①東ティモール民主共和国ディリ県アタウロ郡およびメティナロ郡

②ケニア共和国ホマベイ郡ビタ準郡

協働者 ① (特活) シェア=国際保健協力市民の会